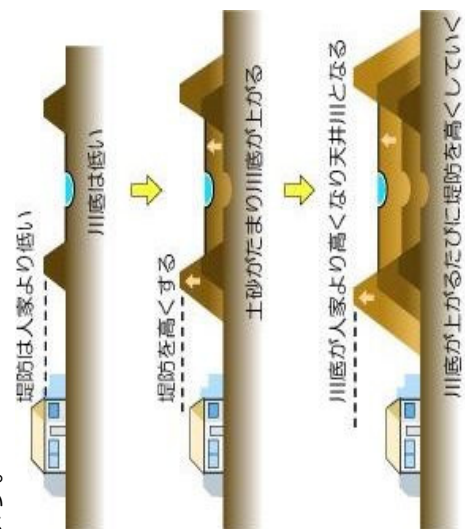


てんじょうがわ 天井川とは？

川底が、周辺の地面の高さよりも高い位置にある川のことを、天井川といいます。



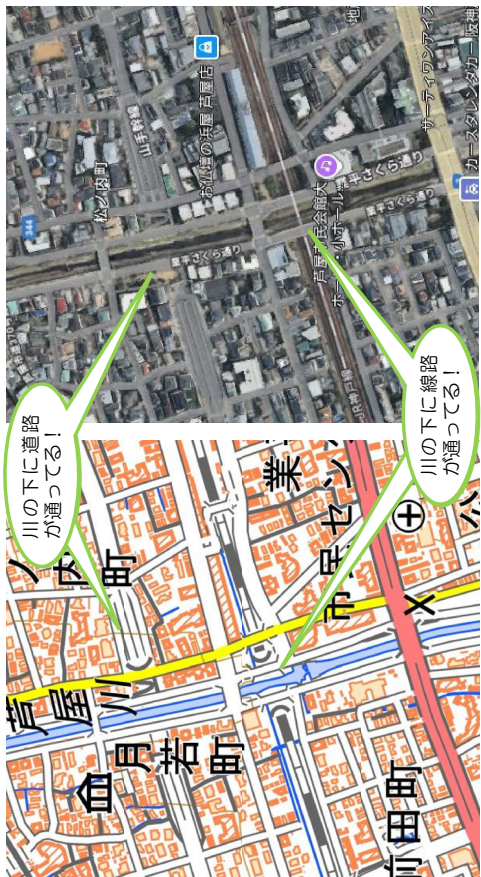
水とともに土砂が多く流れてくる川では、堤防を作って流路を固定すると、土砂がたまり川底が上がっていきます。洪水を流せるように、徐々に堤防を高くしていくと、結果、天井川になってしまいます。このような川では周辺の地面のほうが低いため、洪水が発生すると、川に水を戻しにくいため被害が大きくなります。

(国土交通省国土技術政策総合研究所 HP を引用・加筆)

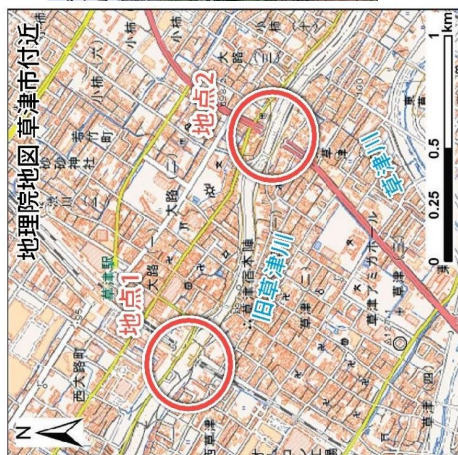


住吉川-JR神戸線交差部

身近にある天井川



芦屋川-JR神戸線、山手幹線(道路)交差部
(国土地理院 HP、Google マップ より引用)



旧草津川-JR東海道本線、国道1号交差部(滋賀県草津市)
(国土交通省国土地理院 HP「山から海へ川がつくる地形」より引用)



阪神大水害

1938年(昭和13年)の阪神大水害は、1995年阪神・淡路大震災にならぶ阪神間における大災害の一つです。1938年7月3日～5日に降った雨の量は、この地域で400mmを超え、この水害の原因となりました。六甲山地のふもとでは、がけ崩れと土石流によって、5千戸以上の建物が流れ、水につかった家は10万戸以上、街中には直径1mをこえる巨石が転がり、土砂に埋もれ、700名ちがい死者・行方不明者が出ました。とくに住吉川周辺の被害は大きく、たくさんの建物の1階が水に浸かりました。そのような谷崎潤一郎が小説「細雪」の中で登場人物の目線で表しています。この地域には流れ出した巨石を用いた災害碑がいくつか残されているほか、これらの巨石を宅地の周りの壁に利用しているところもみられます。

この災害をきっかけに、六甲山地からの土砂災害を防ぐ砂防事業が始まり、現在、六甲山地の谷間には600基あまりの砂防ダムが造られ、土砂をせき止めています。阪神大水害から80年以上の時間がすぎ、この間、この地域は大きな水害が新たに発生していません。この水害からの教訓として、甲南大学をつくった平生鈆三郎が残した「常二備へヨ」の言葉は、現在もなお、この地域にとって大切なメッセージとなっています。



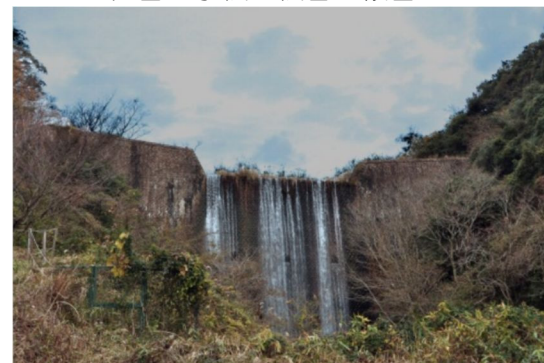
阪神大水害の主な被害地域 1)



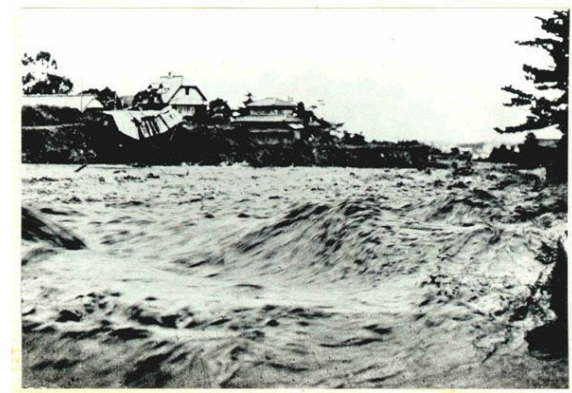
国道2号 住吉橋付近の巨石 1)



住吉小学校の校舎の被害 1)



五助堰堤(住吉川、1957年完成) 1)



白鶴美術館の南側の住吉川の流れ 1)



土砂くすれを防ぐ森づくり 1)

1) 国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所ホームページより引用

【地理院地図+等高線+色別標高図】

